

評議会だより

第四五〇回評議会

平成四年一月二〇日(火)

(教員選考報告)

学校教育学部

助教授 古川義宏(理科教育)

医学部

助教授 鈴木 衛(耳鼻咽喉科学)

医学部附属病院

講師 河野道生(内科)

歯学部附属病院

助教授 名原行徳

(特殊歯科総合治療部)

工学部

教授 寺西靖治(地域環境工学)

// 山下英生

(回路・システム工学)

生物生産学部

助教授 田中秀樹(食糧管理学)

// 中野宏幸(衛生微生物学)

以上の報告があった。

(報告)

一 秋季中国・四国地区国立大学長

会議について

一〇月二十九日、三〇日に本学で

開催された標記会議の概要につい

て報告があった。

二 平成六年度における入学者選抜

第二次試験の実施方式・日程等について

各部局の検討結果に基づき、国立大学協会に回答した旨の報告があった。

三 大学設置基準等の改正に伴う学部の教育の整備について

教務委員会における検討状況について報告があった。

(議事)

一 入学及び編入学等を許可すべき者の選考手続を変更するための関連規程の整備について

原案のとおり承認した。

二 広島大学原爆放射能医学研究所

協議会規程の改正について

原案のとおり承認した。

三 広島大学長選考規程実施細則の改正について

各部局で検討の上、次回の評議会に諮ることとした。

モニターから・編集者から (24期2号)

表紙については、野暮ったいという主旨のご意見と、落ち着いていて好感がもてるという主旨のご意見を半々くらいずつ頂き、功罪相半ばするというところであった。また、写真を入れた方がよいというご意見を相変わらず多く頂いた。内容については、以前より読みやすくなったという褒めの言葉も頂いた。

特集記事について

◆教職員から・下宿が足りなくなつた根本の理由をもっと明確に表現しても良いのではないか/タイムリーな企画でよかったが、学生部長の

「より幅広い発想を」は無責任と思

う。通勤・通学時間は同じでも、利便性・経済性を無視している/現在の状況、問題点が報告されていてよいが、移転についてはぜひぶん前

から計画されているのに、学ぶもののための下宿整備が不十分と言うのは考えさせられる/広範囲の人の意見が掲載されていて興味深かった。

◆学生から・大学はもっと計画性ある移転をすべきであった/新キャンパス周辺の下宿事情が分かって良かった。

開かれた学問については、良かった

たというご意見と同時に、「難しい専門用語が多く読みづらかった」、「書かれた内容が表題からイメージするものと違うのでは」というご意見も頂いた。

留学生の眼については、「対談形式などを取り入れれば本音が聞けるのではないか」という建設的なご意見を頂いた。

今後に期待する記事などについては、「学生の主張なども載せ、もっと学生に身近なものにすべきである」、「『大綱』後の各部局での取り組み等を紹介してほしい」、「学生への配布方法に改善がみられない」というようなご意見を頂いた。今後、頂いたご意見を肝に命じ、よりよい広報誌にするようさらに努力したい。

二四期二号のモニターにあたり、一人の教職員の方から率直なご意見を頂いた。次にその全文を掲載する。

本紙の印象

表紙の色・デザインとも、一言で言えば「前時代的」と言うことでしょ

うか。もう少し現代的なセンスを取り入れて、改善する余地はあるのではないのでしょうか。

こから始まったのが極めて分かりにくいということです。読み進んで行くと、いつの間にか区分が変わっていった、というのが正直なところ。逆に言えば、記事の内容と区分の間には、強い相関は存在しなかったということでしょう。元來記事の区分というものは、概念区分を与えることにより、編集側の編集意図を示すのが一つの目的だと思いますので、その点が不明確なために、全体として、記事の寄せ集めの散漫な印象を受け、冊子の編集意図がよく分かりませんでした。

もっとも、原稿の自由投稿(?)が基本になっているようですので、この冊子にそこまでのものを期待すべきではないのかもしれませんが...

「特集記事」について

モニターの趣旨とはやや異なるのでしようが、記事を読んでの感想を述べさせてもらえば、「下宿問題」と言う様な基本的且つ分かりきった問題が、何故今頃問題になり大騒ぎしているのか理解に苦しみます。居住場所がなければ途端に困ることは分かりきった話ですから、この様な基本的な課題については、事前にきちんと見直し(通一遍ではなく実行レベルを踏まえての)を付けてから事を進めるべきものでしょう。今

回の問題が、実際にどうだったのかは良く分かりませんが、どうもこの大学、さらに言えばこの地域にはこの手の話が多いような気がします。おそらく、この手の話はこの辺りでは日常茶飯事であり気にならないのでしようが、私にとっては、非常に気になると同時に全く理解できません。(関連したことをその他に書いていますので参照して下さい。)

「開かれた学問」について

掲載されている記事の内容は大変立派なもので、興味深く読ませて頂きました。ただ、純粹に私個人の感性に従って発言させて頂ければ、記事の内容と「開かれた学問」という記事区分との間に大きなギャップを感じました。(恐らく、著者には何の責任もないのだと思いますが...) 個人的には、「開かれた学問」と言う言葉は、特に大学に関してこの言葉が持ち出される時には、とかく自分達の興味だけに閉じがちな学問研究に対して、さらには大学という象牙の塔に閉じこもりがちな研究者達に対して、現在の大学の存在意義や大学に於ける学問研究の在り方・意義が、現代的なセンスで問いかけてられているのだと思います。この言善し悪しはともかくとして、この言

葉を用いる場合には、その事を強く意識する必要があると思います。

今回掲載された記事そのものは、著者(達)の研究が実用ベースの話に如何に応用されて成果をあげているかということに関する、個別事象の紹介記事としては面白く読ませて頂きました。しかし、上記の観点から読んだ時に、「普通事象」としての、「大学に於ける研究活動の意義云々」といった考察に組み入れるべき情報が殆どなく、肩透かしを食うのです(注1)。これが、上で述べた大きなギャップの正体です。もしも毎回この様な内容の記事(注1)が掲載されているのであれば(不勉強でバックナンバーに関する知識がありません。申し訳ありません)、必ずしも記事区分の表題がふさわしいとは思えないのは私だけでしょうか?

注1... 何度も申し上げますが、今回の記事の内容そのものを否定するものではありませんので、くれぐれも誤解の無い様に願います。

「留学生の眼」について

記事の内容そのものはよろしいかと思えます。ただ本紙の印象で述べたように、記事がどこにあるのか一

瞬よく分かりませんでした(一ページしかないし)。特に、今回の著者の名前がたまたま日本人の名前と大差なかったため、前の記事(フォーラム)の続きかと思って読んでしまいました。改善した方が良いのではないかと思います。

方的に意見を述べて終わりになっています。それはそれでまあ悪くはないのですが、色々な国の人達による対話形式にしたり、留学生の意見に対する読者の意見を募るなど、討論の場として活用すれば、より一層有意義なのではないでしょうか。広辞苑によると、フォーラムと言う言葉の持つ意味の一つに、「司会者の指導のもとに、一人または数人が演説を行い、聴衆がこれに対して質問をするようにして議論を進めて行くやり方」と書かれています。この冊子も広大フォーラムと銘打っているのですが、その様な場があっても良いのではないかと思うのですが!

その他

* 著者の出身地・略歴や出身地の情報などを、差し障りのない(本人の了解の得られる)範囲で掲載することなどを考えてみてはどうでしょうか?。記事を書いてくれた人が、どういう人なのか分かれば、より一層内容に対する理解が深まるものです。ただ残念なこと、この国においてこの種の情報の公開は、しばしば人種偏見と紙一重の状況を造りがちですので、実施については余程の注意が必要でしょう。いずれにしても、ここで私が意図していることの本質は、「国際」に限らず人と人との「交流」は、まず相手をよく知り理解することから始まるものだ、ということだけですので、誤解の無い様に願います。

* この企画では、一人の留学生が一

元来私は広大の出身ではなく、中国・四国地方とも縁もゆかりもなかった人間です。広大に来る前に三つの国立大学に在籍し広大が四つ目になります。それぞれの大学で色々見てきた経験から言わせてもらえば、一般に大学人は「井の中の蛙」になりがちですが、その中でも広大は特にその傾向が強いように思います。おそらく本号だけの問題ではなく、全般的な傾向なのでしょうが、冊子全体の視点が、広大や広島地区・中

国地区といった狭い範囲に閉じがちに見えます。おそらく、「開かれた学問」や「留学生の眼」フォーラムといった記事が、それを補う位置にあるのでしようが、それを含めても全体的に「広島大学・広島地方賛歌」という印象を受けるのは、個人的な偏見によるものでしょうか? 勿論、広大(広島地域)が賛美に値する非の打ちどころのない、素晴らしい大学(地域)であるならば何の問題もないのですが、現実には多くの問題を抱えているように思えます。特に大学構成員の全体的な傾向としての、視野の狭さ・先を見通す想像力の貧困さ(勿論例外は大勢いるはずですが)は、改善すべき大きな問題点でしょう。特に、大学が果たすべき一つの大きな役割は「広い視野を持った想像力・発想力豊かな人材を育成することである」と個人的には考えていますので、なおさらその事を痛切に感じます。

今後は上記の事も少しは意識して、もっと広い視点で物事を捉えて、外に目を向けた積極的な編集で、この大学をより良いものにすることに貢献されることを期待します。